

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## <新刊紹介>雲南少数民族理解のために—C・ダニエルズ, 渡部武編『雲南の生活と技術』(慶友社)を読む—

著者	飯塚 勝重, 谷口 房男
雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	29
ページ	168-174
発行年	1994
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00011235/">http://id.nii.ac.jp/1060/00011235/</a>

## 雲南少数民族理解のために

—C・ダニエルス 渡部 武編『雲南の生活と技術』（慶友社）を読む—

飯塚 勝重  
谷口 房男

### (I)

今日の中国は、漢民族と五五の少数民族とからなる多民族国家である。五五の少数民族とは、あくまでも中国政府が今日までに公認した数であり、いまなお民族として認定されていない人の数が、七五二、三四七人（一九九〇年人口調査、『中国民族統計・一九九二』五四頁）となっている。そして中国の西南辺境に位置する雲南には、五五の少数民族の約半数に相当する二六の少数民族が住んでいる。このほかにも、正式に民族と認定されていない人々（民族集団）が多く住んでおり、雲南はまさに多民族が集中居住する地域なのである。

雲南の少数民族に関する出版物は、これまでも少なからず刊行されている。とりわけ一九八〇年代以降には、中国のみならず我が国でも、その数が次第に増加している。とくに我が国における雲南関係図書の多くは、

主に稲作をはじめとして、少数民族の祭祀・儀礼・民話などに関する、日本の基層文化との関わりを取り上げたものであり、人々の関心を強く引くものであった。

ここに取り上げるC・ダニエルス、渡部武編『雲南の生活と技術』（アジア文化叢書 慶友社 A五 四六三頁 一九九四年一〇月三〇日刊）は、このような従来の雲南の稲作や少数民族に関するものと些か異なり、雲南の少数民族の日常生活のありさまと、生産技術の現状を克明に記した実地調査にもとづく報告書であり、雲南の少数民族を深く理解していくために、極めて貴重な材料を提供するものである。

### (II)

本書はクリスチャン・ダニエルス、渡辺武氏をはじめとした日本の五名（歴史学研究者二名、民族学研究者三名）と、中国の雲南省民族博物館（設立準備中）の研究者三名とによる、雲南の少数民族に関する日中両国の歴史学研究者と民族学研究者との共同研究の成果であり、実地調査の詳細な報告書である。

本書の末尾に付している行動日程によれば、グループによる調査時期は、一九九二年一月一日から一九九三年一月一日までの一月間となっている。主な調査対象の地域と民族としては、雲南西南部の西双版纳（シーサンパンナ、元来タイ・ルー語のシブソンパンナーで一二の行政区の意）自治州における平地民である傣（タイ）族（旱傣・水傣・花腰傣）と、山地民である哈尼（ハニ、自称アイニ）族・拉祜（ラフ）（黒拉祜・黄拉祜）族・基諾（ジノ）族・克木（クム、民族として正式に認定されていない人々

を〇〇人と呼称する）人であり、また雲南西部の大理市における白（ペー）族である。

本書の構成と各章の概要は、おおよそ以下のようになっている。

はじめに

高宗裕

本書のために高宗裕氏（雲南省民族博物館籌備組常務副組長）から寄せられた序文である。とくに本書が日中両国の研究者による共同研究の成果であり、急速に移り変わりつつある少数民族の伝統文化の遺産を記録したものととして、本書の意義を強調するとともに、「文化の領域から言うなら、雲南のような多民族省区にとつては、近代化と民族化の関係を正確に処理することが、きわめて重要な現実的かつ理論的な意味合いを有している。

というのは、伝統文化を喪失してしまつたら、その民族は、民族としてのアイデンティティーが保てなくなると考えられるからである。したがって、われわれは、近代化と民族化の二者をうまく結合させ、回り道を極力避けて、ある発達した国家や地域が犯した誤りの二の舞を演じることがないよう希望している。そして、人々がこの調査報告書の中から、いささかなりともその示唆を得られんことを願うものである。」と結んでいる。

## 第一章 西双版纳少数民族の村寨を歩く

田村 善次郎

西双版纳における少数民族のうち、平地民であるタイ族と山地民としてのハニ族・ラフ族・クム人・ジノー族の村寨に赴き、水田耕作や焼畑耕作などの現状を詳細に報告している。とりわけ氏の日本における調査の経験を踏まえ、日本の焼畑との関連を指摘するとともに、少数民族の村寨に移り住む漢族の生活なども報告している。なお氏は、「昔が良かったとは少しも思わない。これまでも変化してきたのだし、これから変化するのは

当然である。しかし、近代化とか文明化とかいうものが、皆を一律にして良いものだとも思えない。多様な世界、多様な生活があっても良い筈である。素朴で純真な山の人々は、これからどういいう道を辿りどこに行くのであろうか。」（四六頁）と問いかけている。

## 第二章 雲南地方伝統生産工具採訪手記

渡部 武

今回の調査による伝統的な生産工具、とりわけ農業生産の工具についての詳細な報告である。すでに氏は、中国各地で農業生産工具を屢々調査されている中国農業史の専門家であり、その豊富な経験と知識が今回の調査にもいかに発揮されている。そうした農業生産工具に関する報告の合間において、とくに注目されるのは、少数民族の村に漢民族が徐々に移住してきているさまを報告していることである。この点はすでに第一章においても（六〇七、八頁）指摘しているが、「近年、この西南地方にも漢族の承包人が大挙して入ってきている。さきほど通り過ぎてきた養魚池では、四川省南充地区岳池県評灘区嘉陵郷三村六社からやって来た兄弟が承包して魚苗（稚魚）を出荷している。卵から稚魚にまでにする技術を四川の方がはるかに進んでおり、先進的な技術を熟知した承包人は着々とこの地に根を下ろし、やがて定住していくようになるであろう。この養魚家の兄の方は地元の傣族の女性と結婚し、けっこう羽振りがよいらしい。腰のベルトに下げた鍵束がそのことをよく象徴している。」（六六〇六八頁）とあり、さらにC・ダニエルズ氏があとがき（四五九〇四六〇頁）でもふれている。このような現象は、今日に始まったのではなく、長い中国における歴史の中で、繰り返し各地で起こったことである。まさにこれこそが多民族国家中国の形成の実態であり、漢民族が辺境へ拡大していく一プロセスであ

るとともに、辺境少数民族が漢民族と融合していく一契機でもある。

雲南には二六の少数民族が居住しており、尹紹亭氏による雲南地方の少数民族の歴史的な経緯の概要について、「雲南地方の民族の源流は史籍に見える用語をもちいて、以下の三つのグループに区分できるといふ。すなわち(一)百越系、(二)百濮系、および(三)氏羌系の三つである。百越系の範疇に入るのは、傣族・壮族・水族・布衣族・侗族(貴州)・黎族(海南島)など、百濮系は、布朗族・佤族・德昂族・克木人など、そして氏羌系は、彝族・納西族・景頗族・基諾族・怒族・白族・傈僳族・哈尼族・拉祜族などがそれぞれ該当するといふ。民族の移動の経路から見ると、百越系と百濮系とは東(東南)から西(西北)へ、氏羌系は北から南へと動いて雲南に到達したと考えられる。」(八五頁)と整理している。このような指摘は、雲南の複雑な民族系統を理解する上で、非常に示唆に富むものであるといえよう。

さらに渡部氏は、とりわけ少数民族社会の急速な変化に伴って、失われつつある彼らの生産用具を調査することの必要性について、「今回調査してみても実感したのは、中国の開放経済政策は、辺境の少数民族に対しても予想外に急激な変革を強いていることであつた。外部からの人口流入、焼畑から定畑(とくに水田の造成)への転換、情報革命の影響(テレビの普及)等々、かつては一〇年単位くらいでゆっくり変化していたペースが、今ではたった一年で何も彼もが様変わりしてしまうほど変化が速い。この時期に少数民族の伝統的な生活の記録をとっておかなければ、彼らの生活の一面は忘却の彼方に置かれてしまうことになる。それにしても、我々のこの仕事は開始されたばかりで、前途は遼遠である。」(一三八頁)と

指摘している。

なお氏が作成した『雲南少数民族伝統生産工具図録』は、紙幅の都合で掲載できなかったとのこと(四五八頁)、いずれ公表されるものと大いに期待したい。

### 第三章 西双版纳傣族の水車

#### — 傣族における機具類利用の事例 —

C・ダニエルス

氏は中国科学技術史の専門家であり、西双版纳におけるタイ族の水車とくに揚力水車と動力水車の利用の現状について詳細に報告している。当該地域の揚力水車は、乾季(一月～四月)の園地灌漑用として製作・利用しており、その製作の過程およびその特徴について報告・指摘している。一方、動力水車である水力駆動の甘蔗圧搾機は、サトウキビを搾って紅糖を作るものである。とくに甘蔗圧搾機には、齒車(山形齒・二段水栓齒車)が用いられており、その起源について追求している。こうしたタイ族における水車の調査などを踏まえて、「傣族の諸技術には中国文化圏とインド文化圏から伝来したものがあり、また西双版纳において独自に考案されたものもあると推定される。この三つの要素を検出して、西双版纳における水車利用の歴史的起源を明らかにする作業はかなりの困難をとまう。これは今後の課題となると思うが、その起源は中国文化圏との関係のみでは語れないことだけは指摘しておきたい。その根拠は以下の三点に求められる。すなわち、(一)漢族は使用しない山形齒齒車が、傣族の動力水車の機構に用いられていること、(二)西双版纳では動力水車を甘蔗圧搾に利用しているが、漢族地区ではそのような確かな事例は一つも検出されていないこと、(三)西双版纳では上掛け水車や胸掛け水車の事例が見つか

っていない、という三点である。これらの事実を考慮すれば、西双版纳の水車には傣族が独自に考案したものもあると認めざるを得ないのである。西双版纳における機具類の歴史を考えた場合、兩大文化圏からの借用の他に、大陸部東南アジアを念頭に置いたこの独自性の側面を視野に入れる必要があるように思われる。」(一九三頁)という。なおこのような指摘は、座談会においても同様に発言されている。

#### 第四章 雲南の漁と船

神野 善治

大理の洱海湖畔におけるペー族の鵜飼いを中心として、雲南における漁撈活動と漁具についての報告である。とくに三百年の伝統を持つという洱海の鵜飼いや、漁獲の減少によって限界に近づいているという。(二二〇頁)果たしてどのような手段で生活に密着して鵜飼いが受け継がれていくのか、気になるところである。また、かつては船上生活(家船Ⅱえぶね)中心の漁撈活動が、「陸上に立派な住居を構える漁民が多く、船を「家」とする漁民は、沙村ではわずかに二戸ほどになったというが、広い湖上を移動しつづ行われる古い漁撈活動の伝承がまだ命脈を保っていたのである。」(二三三頁)とし、「持ち家制度」による暮らしの変化や経済の度合が伺える。なお氏が漁撈活動に着目する視点として、「地域の生産活動を理解するためには、生活を背後で支えているさまざまな技術を総合的に見つめる必要があるだろう。しかも具体的に理解するうえで民具に注目することが有効だろうと考えた。」(二四四頁)と指摘している。

#### 第五章 雲南の生活空間と食文化

—住まいと生活、米の調理を中心に—

印南 敏秀

西双版纳と大理における各民族の住宅の構造と食生活の実状を、豊富な

写真と自身が描いた絵を用いて、詳細に報告している。

今回の調査は各民族の現状における「平均的な、生活文化の記録が目的」であり、また「平均的な生活を営む家」を対象とすることを目的としたが、山地少数民族の「生活変容の度合いが大きい」こと、「茶生産などで商品経済が進」むなかで様々な居住形式が出現しつつある。「床の様式も地床式・半高床式・高床式がまざり、壁も日乾し煉瓦・煉瓦・竹・木舞壁の四種類が見られた。」(二五四頁)と指摘するように複雑に変化している。

#### 第六章 雲南少数民族の民家の伝統と変化

李 銳

西双版纳におけるタイ族・ラフ族・ハニ族・ジノ族の民家の特徴と、大理におけるペー族の民家について、伝統的な建築の特徴を紹介している。また社会的な変化に伴って、伝統的な建築の特徴が次第に崩れていくさまを、実地調査に基づいて簡潔に報告している。

例えば、「経済が発展し収入が増加するようになると、新たに建てられる傣族の民家は、従前の形式は保持されるものの、使用する建築材料方面で大きな変化が見られるようになった。すなわち瓦や木材を用いた民家が増加し、建造面積や高さもゆつたりとし、居住条件は大幅に改善された。伝統的な民族的特質をそなえた建築様式は、まさに新しい建築素材の採用によって面目を一新しつつある。」(三六二頁)とし、また拉祜族の「レンガ造り瓦葺き構造の新しいタイプの民家」など、「彼らの居住環境と生活条件は明らかに改善されつつある。」(三六三頁)と報告している。

#### 第七章 西双版纳山地民族の婚姻習俗と年中行事聞書き

李曉斌

西双版纳における山地民族のハニ族・ラフ族・クム人・ジノ族の婚姻

習俗と年中行事について、聞き取り調査の成果をまとめて報告している。

婚姻習俗も他の生活習慣と同様、次第に変化を生じ、特に解放前と解放後では大きく習俗を変えた民族もある。しかし未だに旧慣を守る民族もある。聞き取り調査した民族の中で、ハニ族は「略奪婚」・「駆け落ち婚」を認める。ラフ族は解放後は双方の恋愛により婚約に至る。クム人は若い男女が自由恋愛をして配偶者を決め、双方の両親の同意を求める。ジノー族は自由であるが、同一氏族や女性一七歳、男性一九歳では結婚はできないなど様々であるが、性の交渉、妊娠については、それが結婚前の前提であったり、漢族ほどのタブーは少ない。しかし、結婚および結婚式は未だ、氏族社会の紐帯を保つものとして種々の儀式・儀礼が取り交わされる。共同祭祀における氏族の団結の場としての年中行事も含め、これらの伝統行事は今後どのように維持もしくは変化するものであろうか。継続した調査が望まれる。

#### 第八章 (座談会) 西双版纳地方少数民族の焼畑をめぐって

田村善次郎、渡部武、C・ダニエルス、印南敏秀、尹紹亭

西双版纳の調査を終えた一九九二年一月二二日に、昆明の雲南民族学院において、とくに山地民族の焼畑(「刀耕火種」)について、当地と日本における比較および焼畑の類型化など、また伝統的生産工具、食文化、生活空間などについて議論するとともに、少数民族が直面する問題などを指摘している。

なおC・ダニエルス氏がタイ族の製紙技術や製糖技術の調査を踏まえた上で、「これは私の推測ですが、この西双版纳からラオス北部を含めたタイ北部・ビルマ北部にかけて、ひとつの独自の文化圏があったのではない

かと考えております。そこには当然のことながら東南アジア文化はもちろんのこと、インド文化や漢族の文化の影響を被った、ひとつの独特の物質文化を持った世界があったのではないかという気がいたします。ただビルマ北部に入れないのが残念です。もし入れるようでしたら、そのことを検証してみたいと思っております。」(四三三～四三四頁)と指摘していることは、この地域の民族と文化を理解する上で、とくに重要な視点である。またこの地域におけるかつての整然たる民族の棲み分けは、さまざまな要因(漢族の移住・政策の浸透など)によって次第に崩れてきており、雲南の民族社会に大きな変化が現れていることを指摘している。

#### \*民具抄録(I)～(VII)

各民族の居住地域で採集した民具を、運搬用具、鍛冶屋、竹の具、狩猟・漁猟具、雲南の編み袋、諸職、大理ペー族の甲馬紙といった七類(I～VII)に分け、各章の末尾に配し、それぞれ民具の写真とともに適切な解説を付している。

あとがき

C・ダニエルス

ここでは、本書の全体的な構想・目的・意図が表明されているとともに、調査中にとくに印象に残った三点を指摘しており、次にみていきたい。

#### (三)

雲南における民族の「このような棲み分けは、多民族が共生していくための知恵であり、地域の社会・政治の秩序を律する原理でもある。」(四五六頁)という。また氏は、雲南民族社会への「漢族の移住と中央政府による非漢族の直接支配が、一貫して非漢族の漢化(漢族との同化)を促進し

てきた。漢族に伴う社会変革を、漢族による雲南の「開発」と捉える見解が中国の歴史学者にある。しかし、このような問題意識のみでは、非漢族の歴史の全体像は果たして把握できるものだろうか。大量の漢族移民の到来は、従来の民族間の共生関係に打撃を与え、その土着社会組織の再編成を余儀なくすると同時に、非漢族の物質文化と精神文化も大きな転換を強いられ、現在もなおそれが継続していることは紛れもない事実である。

非漢族社会の漢化や漢族による「開発」は、確かに雲南の歴史の重要な課題ではあるが、漢化を絶対的な到達点とする基準に照らして、非漢族社会を「先進」と「後進」という発展段階論の枠組みの中で評価する手法は、一面的だと言わざるを得ない。」(四五六頁)と、問題意識を鮮明に提示しており、その意識が本書全体に貫かれているのである。さらに氏は、「非

漢族とは現在の少数民族のことだが、彼らの歴史行動の合理性を理解しようと思えば、彼らの側に立ち、彼らがどのように同化されてしまったのか、また、逆にどのように同化を回避したのかを問わなければならない。だが、これらの設問には通常の歴史資料の分析のみでは回答が用意しにくい。漢文資料には偏見があるからである。漢文資料は少数民族がいずれか同化してしまふであろう後れた民族である、といった趣旨を前提として書かれがちで、少数民族はなぜその「後れた様式」をし続けるのか、少数民族側の論理を踏まえた説明が提示されることが少ない。文献資料の検討のみでは、少数民族の生活と文化の合理性を明らかにすることは難しい。均衡のとれた歴史的認識を得るためには、何よりもまず、少数民族側の論理を明確にする必要がある。そのためには民族学的なアプローチが有効である。人間の生活と文化という原点に戻れば、そこから各民族の固有の論理を導き出

し、文献資料に欠落している実態像にせまることができると思われるからである。実地調査によって基本資料を収集することが、つとに肝心であることはいうまでもない。」(四五六～四五七頁)として、歴史学研究者と民族学研究者による共同研究の意義を指摘するとともに、本書がまさに両者の共同研究の成果であることを強調している。些か長い引用となったのは、この部分こそが本書の特徴を理解する上で、とくに重要と思われたためである。なおさらに氏が、今回の雲南における考察旅行で印象に残った三点として、(一)出稼ぎの内地移民、(二)物質文化の均一化傾向、(三)狩猟・採集の重要性を、とくに指摘していることも注目される。

#### (四)

生産技術を支える道具の使用は、その生産活動のあり方によって規定されてくる。居住環境の変化や、生産活動の内容的変化(例えば、狩猟の衰退、焼畑から旱田へ、旱田から水田へなどと生産様式の変化)、或いは道具そのものの変化(例えば、手動用具から電動工具化など)により、常に新しい道具、古い道具の問題が起こるとともに、不要の道具も現れてくる。しかもそれらが捨てられず保存されている場合も含め、道具全体をあるがままに記録することは、一にその社会の現在の生産形態を表し、またその二には歴史的な形態を指し示すことになる。とくに後者については、そのつど記録を正確にし、遺物を保存することによって、明確な歴史的背景をも語り得ることとなるのである。

「村長の尹広発氏(四二歳)がやって来たので、作図した農具の拉祜語の名称をたずねることにする。ある農具については即座に拉祜語名が回答さ

れたが、かなりの数にのぼる農具については、周囲の人々に確認をとりながら、記憶をたぐりよせるかのようにして答えてくれた。私が前日ノートに記録した拉祜語の農具名を言うと、「そうとも言える」とまことに頼りない返事をする。同道してくれた羅曉榮氏の語るところによれば、今の若い拉祜族の人々は拉祜語を話せなくなっているとのこと。李氏の奥さんも拉祜語はほとんど話せず、すでに彼女のこどもの頃の家での日常会話は漢語であった。もう一、二世代を経過するころには、この村の拉祜語は完全に消滅してしまうことであろう。」(八五～八六頁)と報告している。今回の調査の重要性が的確に表されたエピソードである。固有の言語を失い、旧来の生活手段が変化したために固有の習俗も次第に失われてゆく。しかし、一旦作った或時点での道具は、その当時の生活を支えるために、何が必要であったか、何のためにそれを作ったかを物語る。当時は絶対に必要なものが、時を経て土中に埋もれる程に忘れ去られる。物言わぬ道具を通じてしか、もはや物を言うことができぬとすれば、今、少しでも多く、歴史の変遷を語ることでできる内に、記録し、保存することは意義のある重要なことである。

## (五)

ここに紹介した本書は、雲南に居住する少数民族に関する紹介や解説の書ではなく、短期間に集中して物質文化を中心とした民具や民俗資料を現地で調査し、そのデータにもとづいて、豊富な写真を用いながら適切な解説を付した、雲南少数民族の生活と技術に関する詳細な報告書である。

雲南少数民族の伝統文化は、解放後の五十年間に徐々に変化してきた。その少数民族の村落の変化要因は、電気(テレビ・電気釜)の普及、道路の整備によるものであり、また漢族の移住、政策の浸透(定住の奨励、作物の転換)などによるものであった。ところが、この数年来の改革・開放政策の推進によって、彼らの生活はさらに大きく変化していくとともに、彼らの伝統社会の変化が加速してきているという。このような中で今まさに、彼らの生活と技術を記録にとどめておきたい、という願いを込めて編まれたのが本書である。

本書は、雲南少数民族の文化が、中国文化とりわけ漢民族文化の影響を強く受けているばかりでなく、インド・東南アジア諸民族の文化の影響を受けていることを見逃してはならないことを、我々に教えてくれる。また雲南が中国の西南辺境に位置するとともに、東南アジアへの出入口であり、そこに一つの文化世界が展開していることを、教えてくれるのである。

ところで、評者もかつて一九八六年夏に、僅か二週間ではあったが、中国少数民族研修で西双版纳を旅し、タイ族やハニ族の村を訪れたことがあり、本書に報告している少数民族の生活の一部は、自ら具に見聞したことであり、改めて感動を覚えるのである。